

書 評

川本静子／松村昌家 編著

『ヴィクトリア女王』

— ジェンダー・王権・表象 —』

溝 口 薫

本書は19世紀イギリスの女王ヴィクトリアの「王権と王のジェンダーの関わり」を6人の様々な分野の研究者が違った観点から考察する学際的論文集である。2004年の日本ヴィクトリア朝文化研究学会年次大会において同テーマで開催されたシンポジウムが元になっているが、その折の発表者に加え新たに二人の研究者が加わって、学会の趣旨がさらに明快詳細な形で達成されたものとなっている。19世紀イギリスのヴィクトリア女王が在位した時代とは、今日の文化、社会における諸制度、諸特徴が顕現化し始めた時代であり、その多様な姿について数々の学問的観点から研究がされてきているが、一方で、その長い約65年間、社会的にも文化的にも絶えず変容を続け、その初めと終わりでは大いに異なった質を見せる複雑さがあり、その全体像に迫るということは不可能に近いものがある。だがさればこそ様々な学問分野が一堂に会してその手法を尽くして問題に迫る研究の場は、個別の分野では見えない立体的な一面を見ることができる貴重な機会を提供してくれる。本書は、歴史、文化、文学、美術の分野からそれぞれの専門家が、この時代の名前を冠された女王自身に焦点を当てて、それぞれの角度から、ヴィクトリア女王の王権とジェンダーに迫るものである。その結果、女性というジェンダーを持った立憲君主という存在に関わる表象の、またそこに関わる欲望の複雑なありようを明らかにしている。また、その他よくある学際的論集とは異なり、各論がほぼ年代順に整理され、

テーマも関連付けられた構成となっているので（人名の表記などが全て統一されているというわけではないが）最初から通して読むならば、王権のありようと背景にあって関わる政治、歴史の流れが非常によく分かるようになっている。

以下、それぞれの論考の内容をかいつまんで紹介する。ヴィクトリア女王は、1837年、18歳のときにジョージ4世、ウィリアム4世の後、男児が生まれなかったために王位を継いだ女性君主であるが、あまり大きな支持も得られなかった即位から長期にわたる在位の間、女王国民から絶大な人気と支持を獲得していった。冒頭の章「女性君主とドメスティック・イデオロギー」において川本静子氏は、実はヴィクトリアが妻であり母であるという家庭婦人としてのジェンダーを持った女王であったことが、まずは家庭と道徳性をそのアイデンティティに結びつける価値体系を有した中産階級の支持を得、さらには、そのジェンダーが、政党政治が確立しゆく過程にあった社会の、立憲君主の存在意義をより間接的なものにとどめたい欲望に整合的に働き、その結果、国王大権こそ著しく減少させたもののヴィクトリアはポピュラー・モナキーとして王権の存続を可能にしたと捉えている。この論の下敷きになっているのは、Thompson、Homans等の議論であるが、川本氏の論考は、本書全体の一つの見取り図、ないし本書に関わる基本概念や事情の紹介を兼ねた導入部としての役割もあると考えられる¹。川本氏はまずエリス夫人の『イギリスの女性』やコンダクト・ブックなど、当時のジェンダー・イデオロギー普及媒体を取り上げ、男女の活動領域をそれぞれの本質に見合った場として公領域と私領域を与えた19世紀イギリス社会のドメスティック・イデオロギーの特徴を紹介、さらにバジヨットの『イギリス憲政論』から、立憲君主制についての考え方を示し、それらがともに間接的影響力としての共通性があることを明らかにする。要するに女性は家庭という私領域において公的領域で活躍する男性にその道徳心においてよい影響力を行使する役割を本質とされるのに対し、立憲君主は「相談される」「励ます」「警告する」3つの権利を有してかく「真の政府」に影響力

を及ぼすものと規定されたというのだ。つまりヴィクトリアが妻であり、母であるという家庭婦人であったことにより、王権はスムーズに「女性化」、ないし、象徴的君主化を遂げたとするのである。同時に川本氏は、ヴィクトリア女王個人に焦点を向ける。すなわち、彼女は自らのジェンダーと、それとは矛盾する王位を持つという逆説的な立場の間で、王権の行使拡大の欲望とジェンダー的欲望の間で揺れ動いていたという実像を明らかにする。一方、女王は最終的にはイギリス帝国主義の膨張とともに、帝国の隅々の臣民に慈愛を降り注ぐおおいなる母として帝国支配の象徴的道具としてまつりあげられてゆくが、面白いのは、そうした公領域の頂点にたつ家庭婦人というヴィクトリア女王の存在と表象は、そもそもドメスティック・イデオロギーが女性を縛り付けていた私的領域から脱出する夢を同時代の女性たちに促す役割も担ったらしいことだ。ジェンダーに明確な疑念を持たない女性たちにも、家庭婦人でありながら、居並ぶ男性たちを臣下として従える女王の高貴なイメージに漠然と憧れと夢を募らせた。すなわち家庭婦人女王の表象が、その逆説を通じてフェミニズムが登場する次の時代への影響力のひとつとなったのである。

さてヴィクトリア女王がその生涯において描かせた女王の家族肖像画の数は、どの歴代の王にも勝って多い。それは谷田博幸氏によれば、単に芸術文化支援の一環という意味だけでなく、慈善事業とならんで、王室の存在をアピールするためのイメージ戦略の故であった。それらは単に展覧会に貸し出されるだけでなく、複製版画として大量に出回ることによって、女王のメッセージを国民の家庭の隅々までに伝えたのである。二つ目の論考「笑わない女王ヴィクトリア——『王室肖像画像』再考」は、まず、ヴィクトリアが、ジャーナリズムと写真の時代、また大量消費時代の最初の女王であり、上述したように大量の視覚表象が出回った「イメージ時代の女性／君主」であった歴史的事情を背景に、女王がサバイバルのために中産階級的な家族的イメージを喧伝したこととは別に、女王個人としては実はどのようなメッセージを伝えたがっていたのかを探るものである。谷田氏は、ヴィクトリア女王自身が注文した王室肖像画

に注目し、こうした一連の絵画に一目強調されているように見える中産階級的な幸せな家族イメージ、あるいは家父長的家族像の表層の下に、その構図、配置、明暗、肖像の姿勢と視線の関係、背景、小道具の象徴性を通して、実は皇統とその王権の神格的ですらある強い主張が窺われることを見事に読み取ってゆく。後年「笑わぬ女王」としての肖像を描かせ「女王というものを描くことからシリアスさこそ相応しい」と述べたこの言葉にも、彼女が発信しようとした王としての自己イメージのありようが殊のほか透けて見える。だが女王自身が望んだそうした厳格なイメージは、家庭的な女王のイメージの氾濫のなかに結局埋没していったのである。

第三の論考は松村昌家氏の「アルバート公——ヴィクトリアン・ポピュラー・モナキーの成り立ち」である。アルバート公といえばヴィクトリア女王の夫ではあるが、一般に女王の影となってあまり光が当たらない存在である。しかし、実は婿入りした1840年当初から1861年に病で突然亡くなるまで、度重なる出産によって阻まれる女王の執務の代行を務めるほか、国民と国家の事業に徹底的に精力的に取り組み、国民と王家の距離を近づけ、イギリスの文化と国民の教養向上の企図や国家間の危機等の場面などで重要な舵取りを行うなど、王家の大黒柱として八面六臂の活躍を果たし、それによって王権の維持に大いに貢献した存在であったことを明らかにする。アルバート公はザクセン・コーブルグ・ゴータ公国の次男であり、ヴィクトリア女王とは従兄弟どうしであったことがイギリスに婿入りするきっかけである。が、当然臣下の身、さらに当時の政権は彼への年金をケチるなど、イギリスからは親切な扱いを受けることはできなかった。しかしアルバートは、自分の使命を心得ており、その人柄において、やがて首相ピールを始め多くの人々の信頼を勝ち取り、携わる国家的、あるいは国民的事業を次々に成功させてゆく。この論考で取り上げられているアルバートの事業は、新国会議事堂の壁画装飾プロジェクト、それに先立って行われた美術展、さらにはロンドン万国博覧会、王室の管理機構の簡素化革命、またヴィクトリア女王の先に述べたようなイメージ戦略、ケンブリッ

ジ大学総長としてのカリキュラム近代化改革、工業都市への行幸企図などであるが、そのどれをとっても、アルバート自身が持っていた国家と国民についての明確なビジョンがあったことは、注目すべきことであろう。それは確かに、成功を収める公的な事業のリーダーシップを取る人間が持っているべき資質であろうからだ。またこうした大いなる推進力の根幹にあったものが、常に公共の事業の正しい意図を見失わない的確な判断力、あるいは計画遂行に欠かせぬ堅固な忍耐力、変わらぬ熱意であったと筆者は述べている。こうした論考が面白いのは、よくある王族と異なって珍しいほど真面目人間であったというアルバート公の個性的一面ばかりではない。むしろ歴史状況と個人の上質な精神的資質との関係を明確にするという論考の姿勢だ。こうしたヒューマニズム的な歴史論考は昨今あまり見かけないのだが、個人がその精神を拠り所にどのように歴史的状况を生きるか、そうした歴史的検証は、機械論的な歴史観が台頭するなかでむしろ新鮮で歓迎したい趣がある。

さて1861年女王にとってかけがえのない夫アルバートが突然の死を迎え、ヴィクトリア女王は悲しみのあまり引籠もりの生活に入る。それをもう一度公式行事の席に引き出してくるのが当時の保守党党首デイズレイリなのであるが、本書の第4章はこの両者の関係を論じるものである。両者の関係が注目されるのは、ヴィクトリア在位期間中デイズレイリが最も女王に愛された首相であり、この二人の間に生まれた個人的にも親密な関係こそが、1881年のデイズレイリの死後、大英帝国の絶頂期に最も偉大なる女性君主としての輝く表象をヴィクトリアが受ける原因になるからである。「ヴィクトリア女王とデイズレイリ」において村岡健次氏は、両者の親交の要因を、両者の個人的気質と生育環境が及ぼす性的性向のありよう、そして両者を取りまく政治的歴史的状况、そしてそのなかで両者が持つようになった政治意識や態度がその個人的性向と相互に関連するものとして捉える。例えば、女王は、女王という人生以外を知らない存在であり、また父親を知らない女性であった。一方デイズレイリは、(反対に母親に恵まれなかったために) ことのほか女性を崇め空想の中に生の

喜びを見出す文学的気質の持ち主で、進んで自らをロマンティックな女王の騎士として位置づけ、大量の文書のやり取りのうちに、両者の間に相互にとって魅力的なしかも濃密な宮廷恋愛風の感情を作り上げたという。いまひとつは両者の間の政治的信条の一致である。保守主義とは既存の王政、貴族制、議会制、私有財産制、ジェントルマンの価値体系など、伝統的な体制や価値を保守する政治的信条を持つ主義であるが、村岡氏によるなら、ディズレイリはこれに、国民一般に至高の倫理価値を認める、いふならばナショナリズムの核ともなる思想を接続させたという。こうしたディズレイリの保守民主主義思想は60年から70年にかけてのイギリスの自由主義から帝国主義へという政治状況の転換に対して、また労働階級への選挙権拡大、すなわち大衆民主主義への傾斜の時期に、極めて適合する思想であった。そしてそのことは、まさに、ヴィクトリア女王の、庶民のなかの高潔な感情を認めうるリベラルな一面と共振したこと、さらには彼女の帝国主義的志向、すなわち何が何でもイギリス国家と名誉の追求に直情径行的に取り組む一途さと、皇帝の称号に対してもっていた単純な憧れと一致したというのである。女王の帝国の母としての表象獲得の裏には、かような形で個人的、政治的欲望が合体したきっかけというものがあったということがわかるのも歴史家の目を通してならでは明確になることだろう。

第5の論考「女王と外国人とユダヤ人」は、上記のディズレイリを含むイギリスのユダヤ人とヴィクトリア女王の関係を中心に、女王の外国人、ユダヤ人に対する姿勢から、実は女王が立憲君主としての慈愛深い象徴的存在に穏やかに留まる君主などではなく、政治状況に疎いまま国王大権に拘泥し続ける権柄づくの一面を持っていた点に向けられる論考である。渡会氏は、まず13世紀から続いたイギリスの国籍の原則「出生地の権利」に触れる。これはイギリス領土における生誕をもってイギリス国民を認めるものであり、血統主義を重んじる日本の国籍法とは違って、異民族にも寛容な原則であった。したがってユダヤ人もまたイギリス領に生まれる限りその臣民とみなされたのである。だが、だからといってそれは基本的に差別がないということとは別であると渡会氏は

指摘する。19世紀には、ユダヤ教者を無資格としてきた以前の法律も撤廃され宗教的自由も認める状況にあった。そのような背景を認めた上で、1849年のイギリス領生まれのユダヤ人ドン・パシフィコ事件を通して、女王がどのように振舞ったかを明らかにする。パシフィコがギリシア王政下における迫害からイギリス政府に保護を求め、これに救援の軍を差し向けることになったとき、女王は、国籍原則に基づく慈愛を発揮するどころか、もっぱら王の許可を経ずして自由主義的外交判断を優先した時の外相パーマストンに対する怒りに終始したのであった。さらに、イギリス在住のユダヤ人成功者、ロスチャイルド家の爵位授与に関する上奏についても、ヴィクトリア女王の反応は、やはり国王大権を振りかざす差別的なものであった。女王がその爵位授与を拒んだのは、ロスチャイルドが投機で金持ちになった都市成金であった点、つまりイギリスの伝統的貴族文化、あるいは富の背景を所持していないという理由であった。しかしやがてこの一族の三代目がイギリス貴族的な生活基盤や文化背景を完全に獲得し巨万の富をバックに皇太子とも学友として懇意であることが分かるに及んで爵位を与えているのである。

最後の論考は、帝国主義時代の女王と女王が後見となったイギリスに暮らしたアフリカ人女性との関係を中心に、人種に寛大な帝国の慈愛深い母としての表象を再考するものである。「女王は帝国の母だったのか?——サラ・フォーブス・ボネッタの物語を中心に」の中で、井野瀬久美恵氏は、まず1850年当時奴隷貿易で栄えていたダホメー王国で生贄にされそうになっていたところをイギリス海軍将校、フレデリック・フォーブスに救出された少女についての物語を、種々の資料等をつき合わせて検証を行い、イギリス人フォーブスによる奴隷解放ともいうべきそのサラの物語が、実際には奴隷貿易を黙認していた帝国主義的イギリスの実体を隠蔽し、むしろ「文明化の使命」という美名にすりかえる物語であることを読み解く。また、サラはその後、女王の後見を得て一時イギリスで教育されるが、アフリカの学校に戻され、なぜかまた、1855年、女王の要請により、突然再びイギリスへ戻されるのである。結局、サラは、62年、

今度は女王の世話で、同様に文明化の成功例であるアフリカ人の男性と盛大な結婚式を挙げアフリカに帰る次第となる。しかし実際には彼女はその男性とは結婚する意志がまったくなかったこと、また女王がそうしたサラに結婚を強く促すべく周囲に強制したらしいことが窺われ、井野瀬氏は、そこに帝国の慈愛深い母とは別の一面、すなわち文明化の使命を果たす帝国の博愛主義を宣伝する道具としてサラを扱う強権主義的な母を見る。実際、1861年には、ヴィクトリア女王がアフリカの王に一冊の聖書を手渡す巨大な絵画が描かれているが、そのタイトル「イングランドの偉大さの秘密」が示すとおり、その絵はイギリス社会の「文明化へ使命」意識の浸透を図る宣伝媒体であった。この絵が描かれた時期が第二次パーマストン内閣と重なることを考えてみれば、またサラの結婚によって締めくくられる二度目の英国滞在もまた同時期であることを考えるなら、それらの時期的符合は、まさにサラをめぐる帝国の操作の可能性を強く暗示するのである。ただ興味深いのは、すべてを掌握したかのように見える帝国の母にとって皮肉な事態が付随することであろう。というのは、サラが結婚した相手が、実はイギリスの手先とは程遠い、むしろ西アフリカナショナリストの先駆的存在としてアフリカ人のアイデンティティに目覚めた活動をしていたのである。またサラとても一方的にイギリスの都合のよい道具では終わってはいない。彼女はその死の間際、破産したフォーブスを救うために、「今こそ大英帝国の慈悲深さを証明してほしい」と、植民地政府裁判所に訴え出ているのである。その「声」に井野瀬氏は、まさに大英帝国が母と娘の双方向的な関係のうちに成立しているという歴史の事実を見る。そして読者は、その声のうちに、女王の王権と表象を維持する強い要請のあった歴史的状況のなかで、本当の名は決して分からないままサラという名で一生を歩んだ一人の人間の小さな個人の声がある、その重さを感じ取る。

注

- 1 Dorothy Thompson, *Queen Victoria: Gender and Power*, Virago Press, 1990. Margaret Homans and Adrienne Munich, Eds., *Remaking Queen Victoria*, Cambridge U.P., 1997. Adrienne Munich, *Queen Victoria's Secrets*, New York: Columbia U. P., 1996. 詳細は本書、100ページの谷田博幸氏の文献リストが大変参考になる。

(MINERVA 歴史文化ライブラリー⑨ ミネルヴァ書房、2005年、
本文332頁、本体3500円＋税)